



2017.6
vol.205



この声は何処から。そして何処へ？

学校長 飯山 等

私が中高生の頃、年齢40代ぐらいで社会風刺を利かせた辛口が人気の漫才コンビ「コロンビア・トップライト」がいました。私も少し背伸びをするような気分で大人のしゃべりを楽しんで聞いていました。そのコンビは1974年にトップ氏が参議院議員になったためにコンビを解消し、もう一人のライト氏は時々テレビで漫談されているのを見るくらいでいつしか私も忘れていきました。その何年後かにテレビで、彼が1991年64歳のときに喉頭癌で声帯を切除して声を失い、食道発声法を訓練して、その経験を通して講演や、様々な社会活動をされていることを知りました。食道発声法で「あ」の声が出るのに3年かかったこと、その間、奥さんは鬼となって叱りつけ、わざと怒らせて奮起を促してくれた、とも話されていました。そして、この声は《第二の声》だと言われ、「この声は、自分と妻が苦勞を重ねてやっと手に入れたものです。だから、この声を汚い言葉や人を傷つけることに使いたくない。人を喜ばせ、世の中を明るくすることのみ使いたいのです」と話されたことが心に残りました。

しかしそのときの私の感情を振り返って見ると、それほどの苦勞を経て手に入れたことだから、そのように大切に思うのも当然だろうなという、自分と離れた感動物語として聞いていたように思います。でも今は、そう受け止めたことを、自分という小さな窓から浅く見ただけの、さびしい領解の仕方であったと恥ずかしく思います。考えてみ

れば(考えるまでもなく、と言うほうが正確なのですが)、私の「この声」もそうであった、ということにまったく気づいていなかったのです。私の「この声」も、私の育ちの家庭をはじめとしてすべての環境が、そして私のいのち自身が、願い、身に獲得させてくれた尊い事実なのです。それほどの苦勞(というよりは愛と言ったほうが)によって「この声」となっている。誰もが、物言う前に、それはそれは豊かなあふれるばかりの物聴く時を持った。いのちの育ちの歴史の中で、自分のために声かけられた、自分のためだけに存在した言葉を、どれほど聞いてきたか。その実りとして「この声」はあるのです。

一昨年11月に恵まれた初孫が今4月から保育園に通い始めました。誰もそうであるように、登園して母親と離れるときは涙がいっぱいになります。そして、迎えに来てくれた母親の胸に飛び込み、ぴたっと身体を預けて「あーちゃん、ばい」(お母さんおっばい)と一言。1歳5ヶ月になった彼は驚くほどよく聞き、よく見ている。たくさんのことをすごいスピードで理解吸収しています。その彼が発する言葉はまだほんの数語。「あーちゃん、ばい」、その一語に至る豊かな世界。そこから生まれ出ている一語なのです。人はみな泣いて生まれてきます。それはきっとこれからの、生きてゆくことへの不安がそうさせるのではないのでしょうか。しかしその声を聞いて、そのときを待っていた皆は喜び、笑顔になります。その笑顔が、生まれたばかりのいのちの勇氣と希望となり、新たないのちは安んじてこの世界を呼吸し始める。「この私」を育む惜しみない世界がある。「この声」はそこから。そして、そこへ。